

## 龍年 `キープクライミング`

(2012.1.05)

JANUARY 

ここ数年、落ち込みっぱなしの世界であった。日本は最後に、いやと言うほど叩きのめされた。何をしても「こんなことしていいのか？」と反問してしまう気分になってしまった。年が明けても「明けましておめでとう」と言うのがはばかれているような自分に戸惑った。底を打つほど落ち込んだのだから、後は反転して上昇するだけだ。今年は龍年。昇龍のごとく、大きく飛翔するしかない。素晴らしい一年に！

地下鉄のホームに、[Keep Climbing] という航空会社の広告があった。飛行機は向かい風の時こそ上昇する。どんな時でも、向かい風に向かって上昇し続けるとの宣伝であった。人は落ち目になったりすると、伏し目がちになり、下を向き猫背になりがちである。子ども達も、非行に走ったり、生活が荒れると、姿勢が悪くなり、下を向き、下から上目づかいに社会を見るようになる。政治も経済も行き詰まり、閉塞感が漂うと、誰もがうつ向き、背中を丸めがちに見える。

しかし、向かい風の時に、航空機だけが、上昇の風をとらえることができる訳ではない。向かい風を後ろに吹き飛ばされる逆風とするか、上昇気流のチャンスとするかは、その人の姿勢にかかっている。頭を上げ、背筋を伸ばし、胸を張っていると、しっかりと風をとらえることができる。

ある集会で、一人の青年の姿勢と礼の仕方がキリッと決まっているのが目立っていた。集会の後で、話しかけたところ、子どもの時から、起立の仕方、礼の仕方を厳しく指導されていたという。社会のリーダーを養成するイギリスのパブリックスクールでは、入学して、第一に行う事は、背筋を伸ばし、胸を張って前方を見据えて、しっかりと歩くことを身に付けさせることである、という話を聞いたことがある。

どんなスポーツでも、優秀な選手は、腰がしっかりと背筋が通り、軸がブレない。格闘技でも、球技でも、構えを見ただけで強いかわかが分る。子ども達にも、日常生活の中で、姿勢を正し、しっかりと立つこと、座ること、歩くことを身につけるように、しつけていきたいと思う。どうか、ご家庭でも、お箸の持ち方、挨拶の仕方、正しい姿勢を教えてください。



# 心の交流「TVに子育てさせないで！」

(2012.2.01)

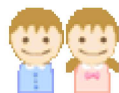


今冬は大寒波がやってきて、インフルエンザが猛威をふるった。小中学校が休校する中で、ある小学校のことがラジオで紹介された。休み時間の度に、窓を開けて換気をし、子ども達に外で遊ぶように促していたところ、インフルエンザが流行しなかったという。インフルエンザを予防するために、加湿器を設置して、一日中閉めきった室内でジツとしていれば、かえってウイルスを充満させることになる。いつも、部屋の戸を開閉させ、子ども達が出たり入ったりしている、あるいは開けっ放しのクラスがある。そういうクラスの子も達は、実に活動的である。加湿器の効果はないが、換気の必要もないくらい元気である。活動的であるから、体力も付く。体力があるからインフルエンザにもかかりにくいし、かかったとしても回復も早い。本園には、この寒さの中でも、頬を真赤にさせて半ズボン、半袖の子が大勢いる。

東南アジアを旅行すると、現地の人は勿論、欧米人はお腹を壊したりしないのに、日本人はやたらと弱い。無菌状態で育っているから、抵抗力が弱いのであろうか。そのくせ、雑菌だらけの生の牛肉などを好んで食べる。危険は避けるべきであり、極端な衛生観念は、かえって免疫をなくしてしまう。

幼稚園の活動についても、同様のことが言える。あまりに安全について神経質になると、子ども達の活動を抑え、危険を回避し予防する能力を育てられなくなる。子ども達のチャレンジ魂を刺激し、冒険心を奮わせるような環境の方が、子ども達にとって面白い。しかし、最近の幼稚園は、とても面白くない。少しでも子ども達がケガをすると、その遊具をすぐに取り払ってしまうことがある。ひざをすりむいた位でも、猛烈に抗議する保護者がいると、幼稚園がだんだん防衛的になり、委縮してしまう。子どもの環境が女性的になっている。

幼稚園ではブランコでの衝突事故が多い。ブランコの動きを予測せず、動いているところに入ってきてしまうからである。そのため、ある幼稚園ではブランコを撤去してしまったという話があった。極端な話し、園庭を走ってはいけないということもある。子ども達はどこを走ればいいのか。走って転ぶのは当たり前である。転んで転んで転ばなくなり、自分の体をコントロールする調整力をつける。ひざの擦り傷とバンソウコウは子どもの勲章である。危険だから撤去するのではなく、ブランコが動いているところに近づいては危険、ということを教え、危険を予知し避ける能力を育てることが大切である。それを育てるべき時期に育てなければ、将来、危険を避けることができなくなってしまう。大きな事故に繋がる危険は排除し、子ども達が思い切り体を動かし、体験していく環境を守っていきたい。



## 無菌と抵抗力

(2012.3.01)



今冬は大寒波がやってきて、インフルエンザが猛威をふるった。小中学校が休校する中で、ある小学校のことがラジオで紹介された。休み時間の度に、窓を開けて換気をし、子ども達に外で遊ぶように促していたところ、インフルエンザが流行しなかったという。インフルエンザを予防するために、加湿器を設置して、一日中閉めきった室内でジツとしていれば、かえってウイルスを充満させることになる。いつも、部屋の戸を開閉させ、子ども達が出たり入ったりしている、あるいは開けっ放しのクラスがある。そういうクラスの子も達は、実に活動的である。加湿器の効果はないが、換気のないくらい元気である。活動的であるから、体力も付く。体力があるからインフルエンザにもかかりにくいし、かかったとしても回復も早い。本園には、この寒さの中でも、頬を真赤にさせて半ズボン、半袖の子が大勢いる。

東南アジアを旅行すると、現地の人は勿論、欧米人はお腹を壊したりしないのに、日本人はやたらと弱い。無菌状態で育っているから、抵抗力が弱いのであろうか。そのくせ、雑菌だらけの生の牛肉などを好んで食べる。危険は避けるべきであり、極端な衛生観念は、かえって免疫をなくしてしまう。

幼稚園の活動についても、同様のことが言える。あまりに安全について神経質になると、子ども達の活動を抑え、危険を回避し予防する能力を育てられなくなる。子ども達のチャレンジ魂を刺激し、冒険心を奮わせるような環境の方が、子ども達にとって面白い。しかし、最近の幼稚園は、とても面白くない。少しでも子ども達がケガをすると、その遊具をすぐに取り払ってしまうことがある。ひざをすりむいた位でも、猛烈に抗議する保護者がいると、幼稚園がだんだん防衛的になり、委縮してしまう。子どもの環境が女性的になっている。

幼稚園ではブランコでの衝突事故が多い。ブランコの動きを予測せず、動いているところに入ってきてしまうからである。そのため、ある幼稚園ではブランコを撤去してしまったという話があった。極端な話し、園庭を走ってはいけないということもある。子ども達はどこを走ればいいのか。走って転ぶのは当たり前である。転んで転んで転ばなくなり、自分の体をコントロールする調整力をつける。ひざの擦り傷とバンソウコウは子どもの勲章である。危険だから撤去するのではなく、ブランコが動いているところに近づいては危険、ということを教え、危険を予知し避ける能力を育てることが大切である。それを育てるべき時期に育てなければ、将来、危険を避けることができなくなってしまう。大きな事故に繋がる危険は排除し、子ども達が思い切り体を動かし、体験していく環境を守っていきたい。



## 取手の幼稚園が「認定こども園」に生まれ変わりました

(2012.4.03)



「街角に、子どもの歓声が聞こえない社会は滅びる」と言われる。活力ある地域社会を作るためには、未来を担う子ども達が生き活きと生活できるようにしなければならない。子どもを産み育てることは、国づくり・社会づくりのために、最も重視されるべきことである。それなのに、子どもの姿が見えなくなり、社会に活力がなくなっている。

ギリシャの財政危機に始まり、世界の景気に暗い陰が覆っている。日本も財政の悪化は深刻な状況である。工場の海外移転も進み、貿易収支も赤字、企業の決算も赤字に落ち込んでいる。何より問題なのは、少子化が止まらず、人口も減少していることで、社会・経済がどんどん縮んでいることだ。

双葉学園の幼稚園・保育園がある地域の中でも、取手は少子化の激しい地である。小中学校が閉校になり、保育所の統廃合が続いている。そんな中で、更に追い打ちをかけるように、取手・守谷地域は放射線量が高く、ホットスポットなどと呼ばれ、辛く苦しい一年だった。

その前から、園舎の建て替えの準備が進んでいた。古い園舎なので、耐震診断の結果、建て替えの補助対象になる筈だったが、財政難を理由に急に予算がつかなくなった。予想外の全額自己負担である。こんな状況の中で、回収の見込みのない莫大なお金をかけて建て替えするなど、まともな経営者なら、やらないことは分かる。

しかし、落ち込んで沈んでいるからこそ、そして、取手は、双葉学園、ふたば文化幼稚園、さらに、子ども達、関わってくれた保護者、職員、何より私自身を温かく育ててくれた地である。子どものいないご家庭や、お年寄りばかりになった地で、幼稚園が、以前のようには歓迎されなくなっても、今こそ、新しい園舎を作って、子ども達の明るい歓声がこだまする地にしたいと、切に願っている。



## 子どもも、親も、間違える権利がある

(2012.5.01)



「急に泣き出したり、朝、登園する時に行きたくないで泣いて暴れます。私の言う事を聞いてくれません。子どもの事が分りません。どうしたらいいでしょう？」とお母さんが言って来ました。「登園すると、満面の笑みで、とても楽しそうに遊んでいます。急に泣き出すことがあっても、抱きしめてあげると、直ぐに泣きやみ、遊び始めます。子どもらしく素直な子です。」と言うと「とても信じられません。」と言います。何でも分ってきていますが、まだまだ幼くて感情のコントロールができなくて、その時々状況や調子で、感情のままに表現してしまうことがあるのです。大人が言ってきかそうとしても、無理なことがあります。ただ、心の中を分ろうと努め、成長発達を待つゆとりが大切です。

子どもには、間違えたり失敗する権利があります。子どもにとっては、殆ど初めてのことばかりです。初めてのことは、最初はできないことばかりです。大切なのは、間違いに気づくことです。間違いに気づくことなしには、学ぶことは始まらないのです。どうして間違えたのか、次は間違えないようにしようと考え、再びチャレンジすることが大切です。それでも一回や二回で、間違えないようになる訳ではなく、何度も何度も間違えます。失敗を繰り返し、できるようになるのです。私達は、子どもが間違え、失敗するたびに「大丈夫だよ、きっと君は沢山のことを学ぶことができるよ」と言うことと、「君には可能性がいっぱいあって、未来は開かれている。心配しないでいいよ」と、そっと支え、ポンと軽くお尻をたたいて押し出してあげることです。

同じ事は、私達にもお母さん方にも言えることです。子育ては、みんな、初めてのことです。みんな、間違えながら子育てします。初めから子どものことが、何でも分ってしまうことなどあり得ません。子どもは一人一人、みんな違うのですから。育児書に書いてあるとおりの子どもなど、あり得ません。育児書は参考にはなるけれど、全てではないのです。育児も、間違えながら学んでいくものなのです。何故、この子は聞き分けがないのか、何故、突然訳もなく泣きだし、何を言っても泣き止まないのか、親が、自分の言っていることを分らそうとするより、まず、子どものことを分らそうとすることです。しかし、誰もが初めは子どものことが分らないのです。分らそうと努力していると、間違えながら段々分ってくるのです。



## これからの社会をよくするのは！

(2012.6.01)



作家で心理学者の加藤諦三さんが、「これからの社会を良くするのは、経済人でも政治家でもない。幼稚園・保育園の先生だ」と書いていました。どういうことでしょうか。

日本は、大借金国だけれど、まだまだ経済的には豊かな国です。しかし、自殺者が20年以上3万人を超えています。交通事故死者の5～6倍に達しています。昨年、ブータン国王夫妻が初めての外国訪問に、震災後の日本を選んで下さり、爽やかな風を残して行きました。ブータンの前国王が、「ブータンのGNP（国民総生産）は、どのくらいか？」と聞かれた時、「我国は、国民がみんな幸福に暮らしているかどうか、ということに重視している。」と言って、GNH（国民総幸福量）が話題になりました。金銭的、物質的な豊かさより、精神的・心の豊かさ、幸福を目指すということです。

ブータンでは、国民の96%以上が幸福だ、と感じていて、自殺者も殆どありません。日本では70%以上の若者が、今の生活に満足しているとのことですが、自殺者やうつ病の患者が増えています。芥川龍之介が、自殺した時「漠たる不安」に苦しんでいました。今は、なんとなく満足しているが、これからどうなってしまうのだろう、というウツウツとした将来に対する不安、恐怖があるのでしょうか。

不景気が原因だという人がいます。しかし、好況の時でも、自殺やうつ病の患者は減少しませんでした。逆に、景気の良い時の方が増えている、というデータがあります。ちなみに、お隣の韓国は、近年世界の輸出大国として経済発展著しいが、人口比の自殺率は世界の中で群を抜いて高くなっています。

そろそろ社会の在り方、私達の生き方を見直す時期にきているのではないのでしょうか。能力の一面だけを計る受験をはじめとする競争に、駆り立てられる生活を見直し、一人一人が自己実現し、自己充実して、社会に役立ち自分の人生を楽しむ生活に切り変える時になっているのではないのでしょうか。

そこで、最初の問に戻ると、人生の脚本は、幼少期にできてしまうと言われていています。自殺の原因は、幼少期の生活に基因することが多いという報告もあります。幼少期には一人一人の子どもの自主性・自発性を大切にして、幼少期には幼少期にふさわしい生活を保障して、自己充実を計ることです。人といると楽しい、生きていることは楽しい、周囲の人々に愛されているという体験を、幼児期の生活の中であることが大切です。だから、これからの社会を良くするのは、幼稚園・保育園の先生の役割なのです。



## 幼稚園は「小さな社会」 人と関わる力、社会性を育てる

(2012.7.02)



オウムの犯人が次々に捕まった。真面目で勉強のできそうな人ばかりである。オウムの信者の中にいた医師、弁護士といった高学歴の人が、どうしてあんないい加減なカルトに騙されてしまうのか不思議である。暗記中心の勉強とは違う、何かもっと重要な知とか能力が欠けているのではないか。近年、人と関わる能力が問題になっている。ここから2回に分けて考えてみる。

人間関係がうまくいかない青少年が増加している。登校拒否、家庭内暴力、陰湿ないじめ、自閉的傾向の増加はその徴候である。原因は複合しているだろうが、その大きな原因の一つは、人と関わる力の不足であることは確かである。祖父母がいて、兄弟の多い大家族と、外に行けば同年齢、異年齢の子どもが大勢いる社会環境の中では、否応なしに人と関わらなければ生活ができなかった。現代は、核家族と少子家族である。外で遊び仲間を見つけることも難しい。このような環境の中では、いつも大人に囲まれ、自分が中心になり、自分以外の人々の心を知る体験は乏しくなる。もともと、人と関わって生きることは大変難しいことである。他人と葛藤し、他人の心を考えることは、とても疲れることである。そんな気を遣うよりも、テレビの前で一人で遊んでいる方が楽かも知れない。しかし、人と関わる力は、幼児期の小さな集団の中で、喧嘩をしたり、仲良くなったりしながら育つものである。

また、これからの情報化・国際社会の中では、主体性とコミュニケーション能力が不可欠である。(オウムの人達にはこの能力が欠けていたのでは?) 自分自身が主体性を持って、情報を選択し、判断できなければ、情報に振り回されてしまう。間接体験ではなく、直接人と関わったり、身近な環境や自然に触れることにより主体性が養われ、自己を確立する。同時に、自分とは異なる他人の心を思いやる能力が、異なる国の文化や伝統を理解し、異文化の中で生活する人々を思いやる能力を育てる。この能力は、美しいものを美しいと感じたり、人が感じていることを自分自身のこととして、共感できる「感性」といってもいいと思う。

もともと、「人」とは一人ひとりが支え合っていることを表している。「人間」とは、人と人との間ということである。人は、人と関わらずに生きていけない社会的存在である。そして、国際社会では、一国の出来事が瞬時に他国の人々に影響する人と人との連鎖の中に人間は生きている。

★次回は「幼児が人と関わる能力を育てていくためには、どのような配慮をしたら良いか」考えてみる。



## 幼稚園は「小さな社会」その2 人と関わる力を育てていくために

(2012.9.01)



幼児にとって、教師は家庭以外で初めて出会う共同生活者である。幼児が外に向かって心を開き、行動するためには、情緒的に安定しなければならない。教師は、幼児が今何を感じ、何を考えているか、心の中を思いやり、理解しようと努めなければならない。幼児と教師の信頼関係の上に活動が生まれ、他の幼児との関わりができる。その意味では、教師にこそ、人と関わる能力、感性が要求される。幼児は、教師との信頼関係に支えられて自分自身を確立し、その基盤に自らが主体となって周囲に働きかけ、様々な体験の中で葛藤しながら、人と関わる力を育てていく。

子どもが主体的生活をするのが、人と関わることになる。指示・命令の従属関係や、幼児が客体となっている主客関係では、幼児が主体となって交り合い、理解し合い、協同する体験は生まれにくい。教師が決めて「させる」ことや、一方的に「教える」ことではなく、自らしたいことを見つけ、すすんで取り組むことができる環境を整え、遊びがダイナミックに展開していけるように支え、援助することである。

遊びを通して主体的生活は助長され、主体と主体がぶつかり合う。指示・命令がなければ何もできないのではなく、自ら考え、最小限のルールを守れば何をしても良いという環境の中で、主体的活動が助長される。そして、みんなと遊ぶと何倍も楽しいこと、遊びが大きく展開していくと楽しさも比例して大きくなること、友達と共感し、協同する喜びを体験する。

幼児は、集団で生活することに意義がある。家では自分中心であっても、幼稚園という「小さな社会」では、自分とは違う家庭環境の中で育ち、違う体験をした他人がいる。この中で、他人を知り、他人も欲求を持ち、異なる主張があることを知り、楽しく生活するためにはどうしたら良いか考える。異なる個性がぶつかり合い、刺激し合って遊びが展開する。遊びの中で互いの価値を認め合い、共存協力して平和な世界を築く人間の基礎が培われる。

『力いっぱい、自発的に、黙々と、忍耐強く遊ぶ子は、又、必ずやたくましい、寡黙な、忍耐強い、他人の幸福と自分の幸福のために献身的に尽くすような人間になるだろう。』（フレーベル）





# 『何も教えない教育』 その1

(2012.10.01)



ある会合の休憩時間に、B先生が「A幼稚園は子ども達に何を教えようとしているのですか？」と尋ねた。すると、A園長は「私のところは何も教えません。」と答えた。するとB先生は「何も教えないのが教育なんですかね・・・？」と、なおも疑問を抱いているようだった。A園長は「何も教えないのがうちの教育です。」と答えた。何だか禅問答の様であった。会議が再開された。私はさっきの禅問答が頭にひっかかっていた。

幼稚園は、子ども達が充実して生活する中で、自ら学習する場だと思う。生活を充実することは、即ち、遊びを充実させることであると思う。確かに、統一的・系統的に文字や数を子ども達に教えることはないので、保護者の中には、「ふたば文化幼稚園は、ただ遊ばせているばかりで、何も教えない」などと言う人もいる。

全員を黒板に向かわせ、文字や数を教え込むことはないが、幼稚園の生活の中（遊びの中）では、文字や数を教えることはある。単なる記号としての文字や数を抽象的に教えることは、幼児期の子ども達にとって、意味のないことを教えることで、決して楽しいことではない。かえって学ぶということは、辛く面白くないことである体験をさせることになりかねない。文字、数に対する興味・関心、学びたいという学習意欲を損なうことになる恐れがある。

それより、砂場でお団子を沢山作って、友達とどちらが多いか、そして、いくつ多いか比べ合ったり、お店屋さんごっこで、看板やメニューを作ったり、お金を作り、売ったり買ったりして、あるいは郵便屋さんごっこで手紙のやり取りをする中で、文字、数に興味・関心を持ち、知りたい、覚えたいと、学習意欲を引き出すことが大切である。・・・来月に続く



## 『何も教えない教育』 その2...10月の続き

(2012.11.01)



「教える」ということから、直ぐに文字・数のことを連想するが、それより、特別に教科として「教え込まず、子どもが遊びの中で学習する中味こそ、幼児教育の本旨である。

「何も教えない」というのは、誤解される表現である。教えないことはない。人間として必要なことの殆どのことを、幼稚園では教えている。子どもが学習するように指導している。

先に挙げたA幼稚園は、キリスト教の幼稚園だった。キリスト教のことは、あまり良く知らないが、キリスト教の幼稚園であるなら、おそらく「汝、嘘をつくなかれ」「汝、盗むなかれ」と指導している筈である。何も教えないことはない。

本園でも、人の嫌がることを人にしてはいけないこと、人にやさしくなること、人の立場に立って物事を考えられるようになること、自分のことは自分でやれるようになること、そして、自分の頭で考え、自分でやって、その結果は自分で負う事、決して人のせいにしないこと。ルールを守ること、ズルはしないこと…等々、社会人としての人間が守らなければならないことの殆どを学ぶように指導している。

これらは、遊びの中でこそ、十分に学ぶことができる。そして、何も教えないのではなく、人間として成長するための目標は、どこの幼稚園でも、その教育理念・教育目標の中にある筈である。たった三つ、四つの教育目標の中に、人間として教養育てなければならないことが凝縮されている。



## 筑波山での子どもとの会話

(2012.12.01)



若いお母さん方の中には、「沢村貞子」という名を知っている人が、どれほどいるだろうか。私は、この明治生まれの女性に憧れている。シャキッと背筋が通って、粹でしゃれている。その芯の強さには、畏敬の念を抱いている。貧しい正直者が苦しめられるような社会は、間違っている、と考えていた。何も悪いことはしていないのに、その考えを変えろという、特高の拷問にたいしても、決して屈しなかった。

沢村貞子の本は、ほとんど読んでいるが、その中でも忘れられない話がある。家の前で近所のおばさん達が、ガヤガヤ井戸端会議をしていると、隣家の女中が「ネエネエ、あそこの奥さん、女郎屋にいたんだって！」と言うと、沢村のお母さんが、その女中をキッとにらんで「それがどうした。今は立派なお店の奥さんだよ」ときっぱりと言った。戦前は、貧しくて、家族のために身売りをしなければならなかったこともあった。過去がどうあろうと、今の姿が大切なのだ。こういうお母さんに育てられると、筋の通った生き方ができる人間に育つのであろう。

沢村の生き方には、学ぶことが多い。沢村の言葉の中に、共感するものが多い。「世界が得をすること、それは平和。（損をすることは戦争か…）」「少々ぐらい、いやなことは黙って我慢しなければ、なかなか平和に暮らせない。ただこれだけはどうしてもいやだと思ふ事は、しないようにしなければ…決して、しないように。残りの人生を、そういうふう生きてゆくためには、目立ちたがらず、誉められたがらず、歳に逆らわず、無理をしないで、昨日の嫌なことは忘れ、明日のことを心配しないで、今日一日を丁寧に、肩の力を抜いて、気楽にのんきに暮らしていこう。」新年にあたって、私も同じことをみんなの前で誓いたい。

